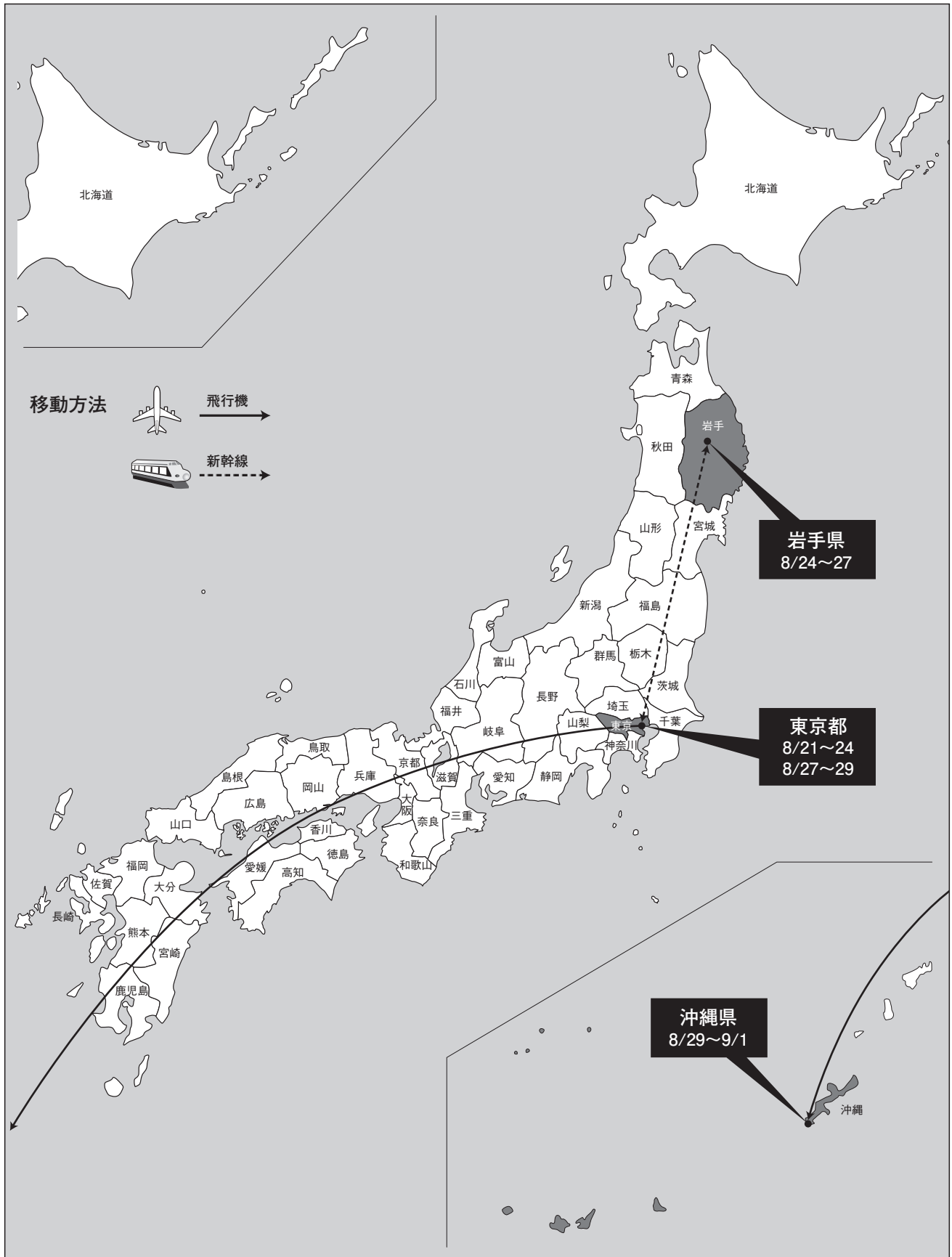


第3章 中国青年日本招へい

行 動 地 図
行 動 記 録
事 業 報 告





行動記録 平成30年度 中国青年日本招へい

	月日	時間	行動日程	都市
1	8月21日 (火)	12:30 14:30-15:40 15:45-16:00 16:15 18:30-21:00	中国青年羽田着 (CA181) 内閣府着、オリエンテーション ・事業概要説明 ・全体日程及び注意事項説明 ・質疑応答 幸田徳之 内閣府審議官 表敬訪問 (代表者のみ) 内閣府発 夕食歓迎会	東京
2	8月22日 (水)	10:00-11:30 12:30-13:30 13:50 14:00-15:00 15:00-16:30 18:30-20:00	<課題別別視察Ⅰ> 裏千家東京道場訪問 ・日本庭園見学 ・茶道体験 昼食 江戸東京博物館訪問 ・講義「江戸東京博物館における文化財保存について」 ・音声ガイドによる自由観覧 幸田徳之 内閣府審議官主催歓迎会	
3	8月23日 (木)	9:30-12:50 13:00-13:45 13:45-14:30 14:30-15:00 16:00-17:00 18:10	<課題別別視察Ⅱ> 東京農業大学訪問 ・大学紹介 ・教員による研究紹介 ① 環境保全の研究・取組 ② 先進的な育種技術 昼食 キャンパスツアー 東京農業大学「食と農」の博物館見学 ・概要説明 ・自由観覧 東京臨海広域防災公園「そなエリア」訪問 ・防災学習及び防災体験 日本青年との夕食	
4	8月24日 (金)	9:08 11:21 11:45-12:40 14:10-14:30 15:00-15:45 18:30-20:00	東京駅発 (こまち9号) <岩手県プログラム> 盛岡駅着 昼食 千葉茂樹 岩手県副知事 表敬訪問 株式会社あさ開訪問 ・酒蔵見学 歓迎会	岩手
5	8月25日 (土)	10:30-12:30 13:00-14:00 14:05-15:35 17:30-18:15 18:45-19:20	中尊寺訪問 昼食 有限会社翁知屋訪問 ・企業概要説明 ・漆工房見学 夕食 村上清 陸前高田市参与 表敬	

	月日	時間	行動日程	都市
6	8月26日 (日)	9:20-10:00 10:15-11:50 12:00-13:30 13:50-14:30 14:50-16:15 18:30	陸前高田復興まちづくり情報館訪問、市街地見学 ・復興概況説明 ・市街地見学(バス) 陸前高田グローバルキャンパス訪問 ・株式会社八木澤商店河野会長による講話 昼食 碓石海岸見学 気仙大工左官伝承館訪問 ・施設概要説明 ・つばきゆべし作り体験 夕食会	岩手
7	8月27日 (月)	8:45-10:20 12:15-13:20 13:50 16:24 18:10	株式会社東海新報社訪問 昼食 一ノ関駅発(やまびこ48号) <東京プログラム> 東京到着 日本青年との夕食	東京
8	8月28日 (火)	9:45-13:20 14:00-17:20 14:00-14:05 14:05-14:10 14:10-14:40 14:40-15:10 15:10-16:00 16:10-17:20 17:40	株式会社TBSテレビ訪問 ・スタジオ見学 ・企業概要説明 ・質疑応答 ・昼食 日本・中国青年親善交流事業 第40回記念意見交換会 テーマ:「メディアの果たすべき役割と、かかる責任」 ・主催者あいさつ ・出席者紹介及び進行確認 ・日本側講師発表 ・中国側講師発表 ・質疑応答 ・グループ別座談会(4グループ) テーマ:「日中両国のメディアを取り巻く環境とその展望」 日本青年との夕食	
9	8月29日 (水)	8:55 11:30 12:30-13:15 13:15-13:55 15:00-15:30 16:00-16:30 19:00-20:00	羽田空港発(JL907) <沖縄県プログラム> 那覇空港着 沖縄県庁着、昼食 オリエンテーション 謝花喜一郎 沖縄県副知事 表敬訪問 孔子廟見学 夕食会	沖縄
10	8月30日 (木)	10:00-11:30 10:10-10:30 10:35-11:20 11:30-12:30 12:30-13:10 14:40-16:20 17:00	沖縄科学技術大学院大学(OIST)訪問 ・大学紹介 ・講師による研究紹介 ・講師とのランチ交流会 ・キャンパスツアー 首里城見学 日本青年との夕食	
11	8月31日 (金)	10:00-12:00 12:30-14:00 14:30-16:00 18:00-20:00	基調講演及びパネルディスカッション ・概要説明及び講師紹介 ・基調講演「沖縄と中国の歴史的なつながり」 ・講演「沖縄の伝統工芸の中にみる中国とのつながり」 ・質疑応答 ・パネルディスカッション テーマ:「琉球と中国における歴史的な交流」 12:30-14:00 地元青年とのランチ交流会 14:30-16:00 沖縄文化体験 ・空手 ・三線 18:00-20:00 歓送会	
12	9月1日 (土)	11:00 13:30	那覇空港着 那覇発(CA832)	

内閣府は、平成30年度日本・中国青年親善交流事業（第40回）による中国青年代表団の招へいを、平成30年8月21日から9月1日までの12日間の日程で実施した。

代表団は、中華全国青年連合会副秘書長の呂偉団長を始め、中華全国青年連合会国際部副部長の孟洋秘書長、コーディネーター、通訳及び団員26名の合計30名で構成された。

各地における活動の概要は、以下のとおりである。

東京プログラム①（8月21日～24日）

8月21日12時30分、羽田国際空港に到着した中国青年代表団は、内閣府にて滞在日程や事業概要についてのオリエンテーションを受け、事業全般に対する理解を深めた。その後、代表者は、幸田徳之内閣府審議官を表敬訪問し、親しく懇談した。

8月22日午前、一行は裏千家東京道場を訪問した。伝統的な日本庭園を見学した後、茶道体験を行い、茶道の礼節と日本人のおもてなしの心に対する理解を深めた。中国青年からは、「日本の茶文化は、精神的な面から格式、内容から文化まで完璧に表現されており、一連の動作がすばらしかった」「日本における伝統文化の伝承は、学ぶ価値がある」等の感想があった。

午後、江戸東京博物館を訪問した一行は、「江戸東京博物館における文化財保存について」をテーマに特別講義を受け、館内を見学し、文化財保存と博物館の在り方について理解を深めた。

18時30分からホテルルポール麹町にて、幸田徳之内

閣府審議官主催の歓迎会が開催された。青少年団体関係者、青年国際交流事業既参加者等多くの出席者を前に、中国青年は文化紹介として歌や少数民族の伝統舞踊を披露し、盛況であった。

8月23日午前、東京農業大学を訪問した一行は、大学の特色や国際交流への取組みについて説明を受けた後、環境保全分野と植物育種分野それぞれの先進的な研究について講義を受け、学内を見学した。中国青年からは、「日本の農業は非常に先進的で、自分たちも学ぶべきだと思った」「今日の社会にとって非常に重要な研究テーマである」等の感想があった。

午後、一行は東京臨海広域防災公園の防災体験学習施設「そなエリア」を訪問した。防災体験ゾーンの見学や災害発生時のオペレーションルームを見学し、非常時における知識を深めながら、日本の防災に対する意識の高さについて理解を深めた。



内閣府主催歓迎会でモンゴル族の伝統舞踊を披露する



そなエリアにて、タブレット端末を活用した防災体験学習をする

岩手県プログラム (8月24日～27日)

8月24日から27日まで、岩手県にて地方プログラムを実施した。

一行は、岩手県到着後、岩手県庁にて千葉茂樹 岩手県副知事を表敬訪問した。副知事からは今回の滞在地である盛岡市や陸前高田市についてのお話があった。

18時半から歓迎会が開かれ、地元青年や関係者等、多くの方の歓迎を受けた。会場を巻き込んだ伝統芸能である「盛岡さんさ踊り」のパフォーマンスは、出席者が一体となって盛り上がり、大変好評だった。

翌8月25日、一行は中尊寺を訪問し、地元青年から解説を受けながら境内を見学した。その後、有限会社翁知屋にて、日本の伝統工芸である漆塗りとその伝承のための取組みについて理解を深めた。

同日夜、一行は村上清 陸前高田市参与を表敬し、懇談した。

8月26日は陸前高田復興まちづくり情報館を訪問し、

震災当時の様子や復興の過程の説明を受けた後、バスで市街地の現在の様子を実際に見学した。中国青年からは、「自然災害を目の当たりにした岩手の人々の精神は勇敢、善良で粘り強く、尊敬に値する」「最も印象深かったのは、まさに象徴となった一本松である」等の感想があった。その後、陸前高田市で醤油や味噌を製造していた株式会社八木澤商店の河野会長から、工場の流出から再建までの道のりについてお話を伺った。

午後は、三陸復興国立公園に属する碁石海岸を見学した後、気仙大工左官伝承館を訪問し、地元の伝統的な菓子であるつばきゆべし作りを体験した。

8月27日、地元の新聞社である株式会社東海新報社を訪問し、震災直後からの地元へ寄り添った報道姿勢や、被災された方々への取材を通して見てきたものなどを、当時の紙面と共に説明を受け、震災被害の大きさについて改めて思いを馳せた。



村上清 陸前高田市参与を表敬する



碁石海岸にて、地元青年から震災時の海の様子について聞く



気仙大工左官伝承館にて、自作のつばきゆべしを味わう

受入感想文

地域の素材をいかした交流

岩手県青年国際交流機構 受入実行委員長

岩手県では、8月24日から27日までの3泊4日のプログラムを実施した。岩手県で最後に行った中国青年受入事業は10年以上前になるため、「今、岩手から中国の青年たちに伝えたいこと、感じてほしいことは何か」「他の地域とは違う、どうい交流ができるのか」について実行委員会のメンバーを中心に意見を出し合い、プログラムを組み立てた。

岩手プログラムとして、岩手県庁での千葉副知事表敬訪問、あさ開酒造、世界遺産平泉・中尊寺、陸前高田市復興市街地、気仙大工伝承館、大船渡市碁石海岸を視察した。

行程の中で、歴史・文化遺産への訪問だけでなく、地域ならではの交流は何かと考えたとき、私たちが中国青年の方々とも共有できる経験として自然災害への教訓を入れることにした。

2008年に中国で発生した四川大地震。私は当時中国の広州に住んでおり、連日のニュースで災害の状況を目にし、現地の惨状だけでなく人々が力を合わせ、困難を乗り越えようとする姿に心を打たれた。

それから数年後、東日本大震災で私の故郷陸前高田市も被害を受け、四川と同じように言葉では表せないほど多くの変化を経験し、国内だけでなく、国境を越えた多くの人々の支えがあって今を過ごしている。四川大地震から10年目を迎えた今年、私の故郷、陸前高田市に中国青年を迎えるということは本当に意義があることと思ひ、復興する地域のプログラムも入れさせて頂いた。

プログラム初日に開かれた歓迎会では、8月生まれ中国青年の誕生日を祝うコーナーを設け、参加者全員が歌いながらお祝いするという和やかな一幕もあった。また、伝統芸能である「盛岡さんざ踊り」を青年たちがステージで一緒に踊り、岩手訪問初日を笑顔で終えることができた。

2日目は盛岡を離れ、世界遺産平泉を訪れた。岩手IYEO実行委員の中には、岩手を代表する寺の住職を務める人材もおり、昼食を一緒にとりながら中国と日本の仏教におけ

る習慣等の違いについて直接話ができる良い機会を生むことができた。

平泉から陸前高田市へ移動し、夕食となったが、市内へ入ってから見えた光景や震災について様々な質問を受けた。その際、私が気を付けたことは、青年たちが普段と違う環境の中で見るものや感じることによって過度のストレスを生まないようにした。現在、世界中で起きている自然災害について課題や教訓を共有し、より良い対応ができるようお互いに意見交換する機会にしたかったからだ。

翌日は、自然からの脅威だけでなく、雄大さや偉大さも感じてほしいという思いから、大船渡市碁石海岸を訪れた。太平洋が一望できる素晴らしい場所だが、中国青年が笑顔で写真を撮る姿に嬉しくなった。

大船渡市から再び陸前高田市へ入り、気仙大工左官伝承館を視察した。気仙大工が建てた茅葺屋根が特徴的な家屋で、中国青年からは「中国にも伝統的な建築物や家具、素晴らしいものがどんどん消えていっている。利益重視の商品だけでなく、大切に残さなければならぬ伝統技術もある」といった感想も聞かれた。

最終日、東京へ移動するためノ関駅のホームで見送りをした際、新幹線の窓から中国青年が笑顔で手を振ってくれる姿に、私は「岩手に来てくれてありがとう」を心から思った。

ともすると、受入事業では代表的な視察場所を選択しがちだが、今回の受入事業を通して、地方の小さな市町村においても日本の文化や伝統を伝える場所があり、海外の青年たちも普段の旅行などでは体験できない交流をすることができるのではないかと感じた。

私も本事業の既参加者だが、この日本・中国青年親善交流事業が継続し、現在の国際交流から国を彩る「国“彩”交流」に繋がっていくことを祈念している。

関係者の方々、本当にありがとうございました。



会場全員でさんざ踊り（歓迎会）



伝統菓子作りに挑戦（気仙大工左官伝承館）

東京プログラム② (8月27日～29日)

8月27日夕方、東京に到着した中国青年一行は、ボランティアの日本青年との夕食交流を楽しんだ。

翌8月28日午前、一行は株式会社TBSテレビを訪問し、スタジオ見学や企業概要説明を始め、日本国内における民間企業の報道姿勢について講義を受けた。中国青年の中にはメディア関係の職に就いている者も多く、多くの質問が寄せられた。中国青年からは「日本で世論などに対するメディアの姿勢が分かった」「メディアの果たす役割は非常に大きい」等の感想があった。

午後、一行はホテルルポール麹町にて、日本・中国青年親善交流事業 第40回記念意見交換会に参加した。

山谷英之 内閣府青年国際交流担当室参事官の挨拶

の後、「メディアの果たすべき役割と、かかる責任」をテーマに日本側講師の時事通信社解説委員より「メディアの役割と課題」について、中国側講師の呉徳祖中国青少年ニューメディア協会副秘書長より「ネットニューメディア時代の青年・文化・交流」についてそれぞれ講義があった。その後、中国青年らは日本人参加者と四つの小グループに分かれ、「日中両国のメゾを取り巻く環境とその展望」というテーマで意見交換を行った。参加者からは、「言葉の面ではギャップがあったが、比較的深い話ができ」「互いに新しい発見があった。通訳を介していたこともあり、時間が足りなかった」等の感想があった。



株式会社TBSテレビで講義を受ける



意見交換会にて、グループ別に意見交換をする



意見交換会の講師及び日本参加者と記念撮影する

沖縄県プログラム (8月29日～9月1日)

8月29日、沖縄県に入った一行は、沖縄県庁へ向かい、謝花喜一郎 沖縄県副知事を表敬訪問した。謝花副知事から歓迎の言葉を受けるとともに、沖縄県の魅力等についてお話をいただいた。

翌30日、一行はバスで恩納村に移動し、沖縄科学技術大学院大学（OIST）を訪問した。大学説明や研究者による研究紹介の講義を受け、中国青年はOISTの先進的な取組みに関心が高かったようで、多くの質問が寄せられた。

同日午後、那覇市に戻った一行は地元青年と共に首里城を見学し、沖縄の文化について理解を深めた。

8月31日、地元の有識者を招き、特別講演及びパネルディスカッションを行った。「沖縄と中国の歴史的なつながり」「沖縄の伝統工芸の中にみる中国とのつながり」をテーマに講演があり、沖縄と中国との深い関係性を理解する貴重な時間となった。

午後は、2グループに分かれ沖縄伝統の空手と三線を学び、中国青年は沖縄文化について学ぶことができた。

9月1日、プログラムの行程を無事終了した一行は、那覇空港へ向かい、13時30分発CA832便で帰国の途につき、12日間の行程を無事終了した。



謝花喜一郎 沖縄県副知事と懇談する (表敬訪問)



実行委員から日程の説明を受ける (オリエンテーション)



基調講演の講師の方に中国の記念品を渡す
(特別講演及びパネルディスカッション)



帰国前に地元青年たちとお別れの挨拶をする

受入感想文

沖縄と中国の深い繋がり

沖縄県青年国際交流機構 受入実行委員長

今回、私たち実行委員が、本プログラムを企画する際に最も心掛けたことは、「沖縄と中国の深い繋がりについて学ぶ」、そして「今後いかに沖縄と中国へ還元するか」についてだった。事業を振り返ると、どのプログラムでも目を輝かせ、意欲的に参加している中国青年たちの姿が伺えた。特に、沖縄科学技術大学院大学（OIST）見学と、講演・パネルディスカッションでは、それぞれ講師を招き、可能な限り参加者たちが講師に質問できる時間を設けた。科学・伝統工芸・歴史の多方面から沖縄と中国の関わりを見つめ、参加者たちからは様々な意見や質問が飛び交った。大学生から社会人まで幅広い年齢の中国青年たちは、学びの意識も高く専門分野も異なることから、自ずと多角的な深い話し合いに広がり、私たち実行委員も大きな刺激を受けた。

また、最初は緊張した面持ちだった地元ローカルクースも、事前に沖縄に関するクイズや歌を準備することで、大いに盛り上げ積極的な交流を深めることができた。彼らにとって、今回中国語で自分の意見や沖縄について伝える貴重な経験となり、さらに、近年の中国人観光客の増加に向け、相互理解を深め、どう深く関わっていくか、各自が考える良い機会になったと思う。

私は、2018年1月に「世界青年の船」事業に参加し、今回本事業の実行委員長を務める機会をいただいた。私

は今まで1度も実行委員長などといった大きな役割に就いたことがなく、更に、IYEOに加入したばかりということもあり、最初は委員長を務めることに不安があった。しかし、世界青年の船で学んだ「リーダーは人によってそれぞれ違い、誰もがリーダーになれる可能性がある」という言葉を胸に、今回思い切って引き受けた。運営側として事業に携わることで、参加者の立場とは違った視点から事業を考えることができ、企画や準備を進める中で実行委員長の難しさも実感した。最終日には、無事プログラムを終えることができたことの安堵感と、実行委員長を引き受けて良かったという達成感に包まれた。

今後も積極的にIYEOを始め、様々な国際交流活動に携わり、自身の異文化理解を深め視野とネットワークを広げていきたいと思う。また、今回の実行委員長や日中受入れの経験をいかし、異文化を受け入れ、尊重し合える社会を目指して国際交流の機会をより一層増やしていきたい。

沖縄と中国は、琉球王国時代から現在に至るまで、政治・経済・文化など深い繋がり長い歴史がある。本プログラムを通して、中国青年だけでなく、実行委員・ローカルクースも含め、参加者全員が身をもって学ぶことができた実感している。今後も、中国と日本・沖縄との素晴らしい交流が続き、その発展を強く願う。



沖縄文化の三線を伝える



那覇空港で中国青年をお見送りする

受入感想文

有意義な交流活動

ローカルユース代表

私は学生時代に中国に興味を持ち始め、中国語や中国文化を学んできた。しかし、これまで日本並びに地元・沖縄を紹介する機会はあまり多くなかったため、今回の事業を通じ、中国青年たちに沖縄を知ってもらい、日中友好に携わりたいという気持ちから参加を決意した。

今回の沖縄プログラムにおいて、私たちローカルユースは、中国青年に沖縄文化を紹介する時間をいただいたので、バスでの移動中に、沖縄音楽の紹介、手踊りのカチャーシー、掛け声の「イーヤーサーサー」等をレクチャーした。すると、最終日の歓送会のエイサー演舞を見た中国青年がカチャーシーを踊ったり、「イーヤーサーサー」の掛け声を実践してくれたりした。これは本当に些細なことだが、まるで自分が小さな沖縄文化大使になったような気持ちになり、とても嬉しくなった。やはり、互いの文化を学び合うことが国際交流の醍醐味だと改めて実感した。

今回、受入れのどのプログラムにおいても質問が活発に飛び交っており、中国青年たちの意欲の高さには圧倒されるものがあった。琉球王国と中国は歴史的に密接な関係があったことから、沖縄文化は中国の影響を強く受けている。沖縄文化を学び知ること、中国青年が「沖縄に親近感を持った」と感想で話していたことは今でも非常に印象に残っている。親近感、つまり相手国に対

し、親しみを感じる瞬間というのは、友好関係に大きく関連すると思う。私の中でも、中国との相互理解を深めるため、文化理解や実際の交流がどれだけ重要なのか考えさせられる機会になった。人的交流や文化交流等形は様々あると思うが、相互理解のきっかけとなる機会の場がもっと増えればよいと思う。

今回、中国青年たちとの意見交換の場で沖縄のことを質問された際、うまく答えられない場面が一度あり、大変悔しい思いをした。私は、今年の10月末から日本・中国青年親善交流事業で中国派遣に参加する。中国派遣時には、日本の青年代表として、堂々と沖縄や日本について紹介するために、文化や自然、歴史、流行等、各分野について幅広くしっかり事前リサーチし、準備するという確固たる目標ができた。また、中国でも文化大使になれるような活動をしたいと思う。

今回、中国青年たちが最終日に話してくれた「また沖縄に来たい」「また会おう」という言葉が喜びと同時にやりがいを強く感じる瞬間だった。受入れは非常に短い期間ではあったが、中国青年たちと友情を深めたこと、並びに私自身中国派遣に対する更なる目標ができたので、大変有意義で貴重な経験ができたと思う。今回の交流での経験をいかして、今後も積極的に日中友好に携わりたいと思う。



沖縄空手の体験をする



バス内で手踊りのカチャーシーを伝える

